

武満 徹のうた

「明日ハ晴レカナ、曇リカナ」は、黒澤明監督の映画『乱』（1985）の音楽を担当した際、連日の悪天候で撮影が停滞するなか、天気を心配するスタッフたちのために即興で作られたユーモラスな曲。

「めぐり逢い」（1968）は、恩地日出夫監督の同名映画の主題歌。作詞を手掛けた荒木一郎のスタイルを意識し、「彼が作詞するならば」という想定のもと、ゆったりとしたバラード調で仕上げられた。

羽仁進監督の映画『彼女と彼』（1963）の主題歌となったのが「見えないことも」。かつて岸洋子が歌い、広く知られることになった。

安部公房の原作を勅使河原宏が監督した映画『他人の顔』（1966）で流れるシュールな「ワルツ」は、武満の多面的な音楽性を示している。劇中では岩淵達治のドイツ語歌詞を、前田美波里が歌った。

「恋のかくれんぼ」は、中村登監督が松村梢風の短編をもとに映画化した『班女』（1961）の主題歌であり、ペギー葉山が歌唱を務めた。

武満は当初、NHK大阪のドラマ『話すことはない』（1983）の挿入歌として「島へ」を作曲したが、実際には使用されなかった。そこで翌1984年、東京混声合唱団の演奏会で合唱曲として改めて発表された。

「MI・YO・TA」とは、武満の別荘があった長野県御代田町に由来する。若き日に黛敏郎のアシスタントをしていた頃のメロディを、黛が「もったいなくてとっておいた」という逸話があり、武満の葬儀の際にも歌われた。

「死んだ男の残したものは」は、武満の歌の中でも特に知られたものの一つ。1965年に「ベトナムの平和を願う市民の集会」のために作曲され、武満の戦争に対する姿勢が反映されている。

「小さな空」もまた広く親しまれている歌。TBSの子供向けラジオ・ドラマ『ガン・キング』（1962）の主題歌であり、西部劇という設定の中にありながら、清涼感と浮遊感の漂う曲になっている。

「雪」は堀川弘通監督の映画『白と黒』（1963）の主題歌。抒情的な旋律の周囲を、美しいピアノ伴奏がさながら雪のように舞う。

「翼」は1982年に上演されたA.コビットの舞台『ウィングス』のために書かれた。まさに翼を得て自由に飛翔するような楽曲で、劇中では市原悦子が歌った。

谷川俊太郎の詩による「三月のうた」は、映画『最後の審判』（1965）の主題歌。早春の寒々とした寂しさと、芽吹き季節の切なさを繊細なメロディで描いた、武満徹の隠れた名曲である。

黒澤明の映画音楽で、武満が初めて手がけたのが「どですかでん」（1970）であった。眩く、温かい旋律が、聴き手をどこか懐かしい場所へと誘う。

「うたうだけ」は1958年の作。谷川俊太郎による「むずかしいことばはいらないの」というシンプルな詩が、武満らしい曲調に乗って流れていく。

「○と△の歌」は、羽仁進監督の映画『不良少年』（1961）の主題歌として作曲された。羽仁の厳しい要求に応えようとしたことで、武満は映画音楽の面白さに目覚めたという。